

中川よしのの400字

テーマ「食卓」

2015年9月1日更新

「塩」

家族のために料理するのは
悪くないと最近思うのです。
私は仕事を失い、
早くこんな生活から
脱しなければというプレッシャーから
鬱病になってしまって
就職活動どころではなくなってしまった。
幸い、日常生活は普通に送れる。
小1の娘の面倒を看られる、
料理すると気分が晴れる。
今は妻の収入で暮らしている。
無職になってから3ヶ月が経つが、
まだ就職活動する気力が湧かない。
決してサボっているわけじゃないと
私は誰にでもなくアピールする。
「がんばらなくていいんだよ」と
妻は言ってくれる。
我ながら良い女性を選んだと
自分を褒める、心のなかで。
今夜の晩ごはんは
鶏肉をレモン醤油と蜂蜜に絡めた
レモンチキンだ。
汁物はわかめとかきたまごのスープ。
蒸しただけのじゃがいもと
野沢菜の漬物もテーブルに並んでいる。
レモンチキンを食べた娘が
「パパのご飯、ママのよりおいしい」
もりもり食べながら言った。
病気の私はその言葉にちよつと涙を流す。
それはしょっぱい。
スープを飲んだ妻が
「ちよつと塩、入れ過ぎたみたいね」と笑った。

「茶碗」

割れた。

食器棚からそれを取り出す時、

不注意で落としてしまった。

かな絵はそれが割れて

ショックを受けていないことに驚いた。

力也と同棲生活を始めた頃に

買ったものだったから、

思い出もずいぶんと

詰まっているというのに。

20年も前の話。

思い出す、同じ絵柄の色違いを、

お揃いで買ったあの日。

恋人になったばかりで

初々しい恋のスタートだった。懐かしい思い出。

だが、それは見事に真つ二つになって割れた。

素手でそれを片づけたら、指を切った。

大して深い傷ではなかったけれど、

赤い血が流れた。

止血をした後、絆創膏を貼る。

その晩のおかずはハンバーグだった。

怪我をしていない左手で、ひき肉をこねた。

なかなか使わない左手なので疲れた。

その晩、帰ってきた力也に謝った。

でも力也は呆気なく許した。

「あ、そう」くらいの感じで。

「また新しいのを買えばいいよ」

その通りだと思い、かな絵も微笑んだ。

その時、(私たちの恋は終わってるんだ。)と思った。

だけれど、悲しくはなかった。

(家族になったんだ。)と思って泣けた。

切った指先が痛んだ。

中川よしのの400字 テーマ「食卓」 2015年9月15日更新

「醤油」

興奮してテーブルを叩いた。

醤油の瓶が倒れる。

テーブルにできる小さな醤油の池。

建太は怒りが静まらない。

「尾形と食事したって、どういうことだ」と憤る。

ひろ子は俯いたまま

「軽率だった。でも相談事してただけ」と

小さな声を発した。

建太はひろ子が作ったおろしハンバーグを

フォークでぐさぐさ刺している。

それから「俺の目を見て話せ」と

刺々しく言った。

それでもひろ子は建太と視線を合わせない。

「やましい気持ちがあるからだ」と建太は責めた。

「違うの、あのね、」と目を見る。

「何が違うんだよ」と怒りは治まる気配がない。

「なんて切り出したらいいのか、尾形さんに相談したの」と

ひろ子は困った表情で話し出す、

「できたの、子ども」。

「え？」

「建太くんとの子どもができた」

その言葉に建太は絶句。

「でも、わたしたち、結婚できるような年齢じゃないでしょう？」

「夢だつてあるし。だからおろした方がいいのかなって尾形くんに、」

「本当に俺の子どもなのか？」

それを聞いたひろ子は建太を平手打ち。

「サイテー」

醤油の匂いがかすかにしている。

中川よしのの400字 テーマ「食卓」 2015年9月23日更新

「薬缶」

火傷した。

ポットにお湯を移し替えようとして

掴んだ薬缶の取っ手は熱くなっていた。

そんな不用意なことをしたのは、

悲しみを引き擦っているせいだろう。

杏果（ももか）は水道の蛇口を

左手で捻って右手の傷口を流した。

「せっかくおいしいコーヒーを

飲めると思ったのに」

と声を出して愚痴る。

だが、その相手はいない。

昨日、喧嘩して別れた。

12回目の別れ。

男とは別れて付き合っただけを繰り返していた。

いつもだったら、

男から電話で謝りの電話が来るはず。

でも今回はもう修復するのは

無理だという予感がした。

昨日は男に相当酷いことを

言ってしまったから。

許してもらえそうなら

友人からお裾分けしてもらった

高級珈琲豆のコピ・ルアックを

一人で飲むなんてことはしない。

男と一緒に飲みたいと思うだろう。

利き手ではない左手で

コーヒーを淹れるのは至難の業だから、

挽いたばかりの豆を

ジブロックに入れて、冷凍庫で保管する。

電話はやはり鳴らない。

流水する手のひらがジンジン痛んだ。

熱くなった薬缶がチリチリと音を立てている。

「酔」

テーブルに食べ物と並べる。
椅子に座る。

目の前にあの人はいない。

昨夜、出て行った。

私の繊細さや心配性ところが
うざったかったと言われた。

何か言い返してやりたかったけれど、

あの人の全部が好きだったので
言い返せなかった。

「ばかやろう」と呟いただけ。

わかめと玉ねぎの酔の物を食べる。

あの人は酔が苦手だったので、喧嘩した次の日などは
わざと出したりもしたが、もうあの人はいなかった。

寂しい。誰かと話したかったけれど、
誰とも一緒にいたくない。

ある夜、酔い潰れたあの人を

部屋に入れてから、一年間、あの人は居続けた。

働かず、部屋で1日中小説を書いて、
文学賞に応募し、すべて落選した。

そう、才能のない人だった。

その上、本もろくに読まなかったから、
小説家になんてなれるはずもなかった。

「現実的になってよ」

昨晚、喧嘩をした時、

思わずあの人に言ってしまったことを後悔している。

スマートフォンが鳴った。

それを無視して酔の物を食べ続ける。

「箸」

食べられない。

そのことをお母さんは知らない。

「早くご飯食べちゃいなさい」と何気なく言う。

だから私も何気ないふりをして

食べる、食べる、食べる。

その後「ごちそうさま」と箸を置いて、トイレに直行。

なんですって、吐くために。

吐くことは悲しい。

せっかく家族のために

お母さんが作ってくれた手間を

台無しにしてしまうようで。

ごめんなさい。

太りたくなかった。

クラスメイトは私のことを痩せていいねと言うけれど、

これ以上太ったらおしまい。

ああ、それは大袈裟だってわかってるけれど、

そう思うのを止められない。

この気持ちを誰にも知られたくない。

そんなことになったら

きつと病院に連れていかれるだろうから。

トイレを出て、洗面台で口を濯ぎ、歯を磨く。

口臭が気になるからリステリンも使う。

居間に戻るとお母さんが言った。

「お茶碗とかお箸、自分で片してよ」

私は何もなかった顔で「ごめん」と言っただけ、それらを片付ける。

お皿の上の箸が転がって、床に落ちる。

いつかそんなふうに私の秘密が

知られてしまうのかもしれないと恐れた。

「味噌」

檀田は中条の家に来ている。

中条の妻は働きに出ているというのに、

二人は昼間から酒を飲んでいた。

中条に「芥川龍之介の河童、

読んだことある？」と訊かれた檀田は

正直に「ないね」と答えた。

しばらく沈黙。

ぼりぼりと季節外れのきゅうりを

味噌で食べる檀田と中条。

「中条は河童読んだことあるのか？」

「ねえよ。でも読んだことないのに

芥川賞受賞したらカッコいいだろ？」

「だな！」

小説を書いているという共通項が見つかって

二人は定期的に酒を飲みかわす仲になった。

檀田も中条も芥川賞を目標に日々研鑽している。

どちらも年齢は四十だ。

午後六時、中条の妻が帰宅する。中条は妻に

「小説で飯食わせてやるから安心しな」

と焦点の合わない視線で言った。

檀田も続いて

「今度の小説、中条さんをモデルにして書きます。

受賞したら、賞金半分払うって約束しました。

期待しててください」と言い放つ。

すると中条の妻はため息を吐いた。

「厨二病なんだから、もう……」

檀田は食べかけのきゅうりに手を伸ばす。

だが、味噌は乾いて食べられなくなっていた。

中川よしのの400字 テーマ「食卓」 2015年10月20日更新

「グラス」

カレーを食べている。

グラスには牛乳が注がれている。

「カレーに牛乳は合わねえって言ってんだろう、ババア！」

勇介が母親の葉に暴言を吐く。

父親の繁夫が「お母さんに向かってそういう口をきくんじゃない」と諭すが勇介は聞く耳を持たない。

テレビではサッカー中継。

ラモスが右サイドをドリブル突破。

カズがゴール前に走り込む。

「部活は楽しい？」と葉が訊いた。

勇介はサッカーに目がいつているので、答えない。

ラモスが左サイドからセンタリング。

カズがデイフェンダーと競り合って

ヘディングで合わせた。

だが、キーパーの好セーブに弾かれる。

思わず「あー」と声を上げる勇介。

しかし、そのこぼれ球をゴン中山が

スライディングしてゴールに押し込んだ。

勇介の悲鳴は歓喜の声へと変わる。

思わずガッツポーズ。

が、その時、グラスに手が当たって牛乳をこぼした。

そのことを叱る繁夫。

「構わないのよ」と制する葉。

葉が布中で牛乳を注ぐ。

「だから、いらねえよ、牛乳！」

牛乳塗れになった布巾から悪臭がした。

中川よしのの400字 テーマ「食卓」 2015年10月28日更新

「砂糖」

長瀬剛の「東京青春朝焼物語」が流れている。

寧人（やすひと）は、晋子（しんこ）が台所で肉じゃがを作っているのを、引越したばかりのリビングのソファから見ていた。

部屋には段ボールの山がまだ積み重なっている。

寧人は35歳で一念発起して東京に出て来た。

2年付き合った晋子に

「ついて来い」とプロポーズして、

新生活をスタートさせたばかり。

晋子の後ろ姿にグッとくるものがある。

堪らず寧人は立ち上がり、

晋子に歩み寄るとその背中を抱き締めた。

「ヤス、急にどうしたの？」

その言葉を見無視して寧人はキスをした。

驚いた晋子は持っていた砂糖入れを

シンクに落としてしまう。

砂糖入れは横倒しになって中身がこぼれた。

「ちょっと、お砂糖、」と晋子が言うが

寧人はキスを止めない。

それどころか晋子の小さな乳房にタッチした。

「ダメだよ、ヤス」

そのまま二人は肌を重ねる。

引越して間もない2LDKのリビングで。

長瀬剛は引き続いて

「I LOVE YOU」を歌っている。

作っていた肉じゃがは見事に焦げた。